

11月6日(日) 10～12時 講師：深串泰光さん(クッシーさん)

参加者：10人

秋晴れの日、気持ちの良い朝だ。まずは感性の準備体操から。「目をとじて、ぐるりと一回り。太陽の光の方向を探して、足を止めよう」顔がふわりと温かくなって足を止めた。次は風の方向を探す。風が頬をなでる。最後は音を聞く。目をとじると、皮膚や耳の感覚が急にうごき出した。

今日の講師、深串クッシーさんの笛を合図に歩き出した。最初に美しい樹形の巨大なヒマラヤスギが立っていた。明治初期に日本へ来て、ここ(当時の農事試験場)に植えられた大木、樹齢150年くらいとか。アフガニスタン原産。ちょっと葉を揉んで匂いを嗅ぐと、いい匂い。これがアレロパシー(忌避成分)、これを含んでいるから、樹下に他の木がはえないという。

次は、ゴツゴツした幹の巨木の、モミジバスズカケノキ。手を繫いで幹回りを測ったら、5人分、約7.5メートル。木の皮がかさぶたのように剥がれる。「ジグソウパズルになるうー」。するとクッシーが、「皮の下には虫たちが越冬したり、卵を産んでるかも」と。だから剥がした皮を元に戻しておいた。小枝の葉を1枚取ると、葉柄の中から茶色の冬芽が出てきた。葉柄内芽という。こうして冬芽を寒さや虫から守っている。

次は、レバノンスギの大木。レバノンではこれを神殿の建材としたので、森林が伐採されて、山はすっかり裸になった。一度はだかにされると雨の少ない地域は、森林が復活しない。文明による禿山化だ。

次はハンカチノキ。日本で最初にここに植えられた。みんなでタネ拾いだ。

地面にはモグラ塚がたくさん並んでいた。アズマモグラのトンネルだという。「家族がいるのかな」「何を食べるのかな」「恋人を見つけるの大変そう」と、疑問が次々出る。「モグラは目が見えないけど、音に敏感らしい。トンネルの中にも、ミミズの気配や恋人の音はすぐにわかるんだって」とクッシーの説明があった。この下にモグラの世界が広がっていると考えると、なんだかうれしくなる。

ラクウショウ(落羽松)は美しい黄金色に燃えている。樹下に気根がニョキニョキ地面から這い上がる。この気根から空気を取り入れているという。

カンレンボク(早蓮木)の実、小さなバナナ形の実が放射状についた、かんざしみたい。これを拾った人は、きっといいことあるという。別名ハッピーツリーともいう。

フユノワラビ、ヤブミョウガ、イヌマンマ、サラシナショウマ、キツネノマゴ、イヌホウズキ、タイワンホトトギスの花盛り。サルトリイバラの赤い実も、仙人草の実も。

もう一つ、炎が立ち登るようにまっすぐに立つ、巨大なユリノキがあった。日本で最初のユリノキだという。ヤツデの白い花が柔らかいモールのようだった。

それぞれの「センス・オブ・ワンダー」を見つけた楽しい時間だった。

(文責 赤藤)

